詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

向日葵の百万本に陽が一つ
和歌山市 大倉 義正

〈評〉ヒマワリ畑に一面に咲く花の数。100万本は誇張にしても、見渡す限りの花に対し、たった一つの太陽という構図が絶妙だ。

緑蔭や白きピアノの音澄みて
八女市 水町 好江

〈評〉白いピアノの音が澄んで感じられたのは、緑蔭の緑との対比の美しさがあるからだろう。

心して読むあとがきや蟬時雨
奈良市 浦城 亮祐

街並みに残るうだつや夏つばめ
さぬき市 西村 民生

しばらくは歩道に遊び雀の子
和歌山 神野 一馬

心して降りる石段梅雨湿り
水戸市 永井 弘子

夏帽子深くかぶりてひとり旅
前橋市 木下美樹枝

車内にはいつもの客や朝ぐもり
相模原市 はやし 央

シャコンヌに聴き入りひとり明易し
越谷市 安居院半樹

微笑みが箱につめられさくらんぼ
高知 渡辺 哲也

小川 軽舟 選

夏草のどくんどくんと膨張す
秋田市 鈴木華奈子

〈評〉夏草の繁茂するさまを心臓の拍動を思わせる擬態語で描いた。ホラー映画のような迫力に家がのみ込まれそう。

床の間の鷹の睥睨夏座敷
横浜市 吉野 暢

〈評〉タカの剝製がいかめしくにらみをきかす座敷。思わず居ずまいを正して主を待つ。

笹百合の囁くやうな香りかな
葛城市 久保 政子

木下闇ランチメニューの灯されて
東京 木内百合子

竹煮草終着駅の車止め
前橋市 武藤 洋一

山国に星々近し河鹿笛
帯広市 柏木 七歩

梅雨晴間鰹節小屋の薄煙
伊勢市 奥田 豊

荒梅雨や飯場の棚のマンガ本
志木市 谷村 康志

籐椅子や休暇の父の葉巻の香
鎌倉市 保坂たつき

黒谷の和紙の行灯夏の月
福知山市 杉森 大介

西村 和子 選

花菖蒲不規則なれど咲き揃ひ
東京 望月 清彦

〈評〉色も丈もまちまちだが、花期は同じ。しょうぶ園のあるがままを手際よく描写した。連用形による余情も味わいたい。

婆娑と音して日傘またうらがへる
津市 渡邊 健治

〈評〉日差しと風向きは異なるので、こんなことがよくある。実際に日傘をさしてこその発見。

解きたる髪に潮の香花海桐
東京 鈴木 智子

明易し老いの目覚めのなほ早し
京都市 小島 一男

微笑みを抓むがごとしさくらんぼ
高知 渡辺 哲也

茄子を漬けつつがなき日の昏れむとす
秦野市 安藤 泰彦

蜻蛉や那須野ケ原を競ひ飛ぶ
東京 東 賢三郎

紫陽花や未来の色を見せ初むる
青森市 小山内豊彦

夕焼に染まる芦の湖ひきしまる
龍ケ崎市 小宮 光司

大夕立鍵屋ノ辻を丸洗ひ
伊賀市 福沢 義男

井上 康明 選

田の果てに筑波嶺据る花慈姑
鎌ケ谷市 佐藤 紀子

〈評〉ハナクワイはオモダカの意。矢尻型の葉が突き出し白いかれんな花が咲き、田の果てに筑波山がかすむ、夏の関東平野の風景。

白極むダチュラ月下の語り部に
甲斐市 松田 健嗣

〈評〉ダチュラは薬用植物、花は大きな漏斗状。月下の白のダチュラは、語り部にふさわしい。

大いなる紙垂のごとくに那智の滝
加古川市 伏見 昌子

空蟬や生前のこと死後のこと
川越市 峰尾 雅彦

口にせぬ思ひの増ゆる蛍かな
北名古屋市 月城 龍二

かなぶんの人差し指を這ひにけり
浜松市 久野 茂樹

斜里岳はアイヌの呼び名花ざびた
上尾市 山口 流離

宿直に一升瓶と蚕籠
霧島市 秋野 三歩

早苗饗やたつぷり田植機に油
西海市 まえだいっそう

字二つ分かつ大川男梅雨
千葉市 畠山さとし

伊藤 一彦 選

朝光にほどけて眠るみどりごのいかさうめんのやうな指先
武蔵野市 谷口 菜月

〈評〉上の句も巧みだが、下の句の実感から生まれた「いかさうめん」の比喩が面白い。わが子へのいとしさがあふれている作。

米川千嘉子 選

今風が出て来て地熱を鎮めてる五目ちらしの大葉が香る
三重 中山由賀子

〈評〉夕方、これから家族が集まるのだろうか。昼間の暑さが収まってきて、やっと人間らしい、懐かしい夏が訪れる。

加藤 治郎 選

さくらんぼ一つはあなた一つは私ずっとこのまま繋がっている
岐阜市 山上 秋恵

〈評〉さくらんぼの房にあなたの実と私の実が付いている。下句は濃い情念である。5777 7という形式がユニークだ。

水原 紫苑 選

海難のこわさ伝える言葉たち新聞にまだインクのにおい
横浜市 大原 香花

〈評〉現実でもあり、抽象でもある「インクのにおい」が、新聞の生の本質である「言葉たち」を呼び起こす。

調べの鼓動

季節の風

星野高士

エルニーニョ現象が発生している。今年は勢いが強く、スーパーエルニーニョとも言われている。エルニーニョ現象が発生すると、日本は冷夏になるはずだが、今のところその気配はない。一方、ヨーロッパでは歴史的な熱波を引き起こしていて、大変な騒ぎになっている。

ところで、エルニーニョとは元々ペルーの漁師の言葉らしい。毎年クリスマス前後に暖流が流れるのを、エルニーニョと名付けたのだそうだ。日本語に訳すと「幼子イエス・キリスト」という意味とのこと。クリスマスの時期の季節現象にふさわしい名付けだと思う。

日本にも「涅槃西風」という季題がある。釈迦が亡くなったといわれる、旧暦2月15日前後に吹く西風だ。春の彼岸に吹くので「彼岸西風」とも言う。この風が吹くと冬の寒さがぶり返す。洋の東西を問わず、昔から気象現象は神や仏が起こすものだったようだ。今は人が引き起こす気候変動ばかりが注目されているが。

船乗りは風に敏感だ。他にも、日本海側で夏に吹く風である「あいの風」、秋に雁が日本へ渡ってくる時に吹く風である「雁渡し」などは、漁師や船乗りの用語が季題になったものだ。特定の季節に吹く風が季題になる例は多い。

ペルーの漁師は海と共に暮らし、エルニーニョを発見したのだと思うが、世界全体の気象現象につながっているとまでは気づかなかったと思う。そう考えると、日々触れている日本の季題たちも、地球規模の気象現象の一部なのかもしれない。

（ほしの・たかし＝俳人）

aidan/)

こちらから
投稿できます

行バス降
同じ作品
ます。